

令和元年度 第1回  
松本市・山形村・朝日村中学校組合  
総合教育会議議事録

松本市・山形村・朝日村中学校組合教育委員会

## 令和元年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議議事録

令和元年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議が令和元年12月25日午後3時松本市役所第一応接室に招集された。

### 議 事 日 程

- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 自己紹介
- 4 懇談項目  
「地域づくりと若者の育成について」  
話題提供 鉢盛中学校長 藤田 克彦  
意見交換
- 5 閉会

## 出席者名簿

### 【会議構成員】

管理者（松本市長）	菅 谷 昭 君
教育長（松本市教育長）	赤 羽 郁 夫 君
教育長職務代理人（朝日村教育長）	百 瀬 司 郎 君
教育委員（山形村教育長）	根 橋 範 男 君
教育委員（朝日村教育長職務代理人）	上 條 利 春 君
教育委員（保護者代表（朝日村））	清 澤 あゆみ 君

### 【鉢盛中学校】

学校長	藤 田 克 彦 君
コミュニティスクール統括コーディネーター	市 岡 章 子 君

### 【事務局職員】

事務局長	山 内 亮 君
事務局次長	小 林 伸 一 君
事務局次長	逸 見 和 行 君
事務局次長	高 野 毅 君
指導主事	濱 中 浩 君
事務局次長補佐	金 井 稔 君
事務局次長補佐	三 村 恵 美 君
事務局次長補佐	田 中 智 絵 子 君
事務局次長補佐	小 西 え み 君
事務局主事	深 澤 亮 平 君
山形村教育委員会	小 林 好 子 君
朝日村教育委員会	上 條 靖 尚 君

## 総合教育会議

### 懇談項目

事務局次長（小林伸一君） 皆さん、こんにちは。

定刻より若干早いですが、ただいまから令和元年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を開催いたします。

議事に入りますまでの間、私、事務局次長の小林でございますが、本日の進行を努めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

なお、本日の会議は公開とし、お手元の次第により進行いたしますので、よろしくお願いいたします。

最初に、この会議を主催する菅谷管理者からご挨拶をお願いいたします。

管理者（菅谷 昭君） お疲れさまでございます。菅谷でございます。

今年も残すところあとわずかになりましたが、仕事納めを控え何かとお忙しい中、教育長並びに教育委員の皆様にご出席をいただき、誠にありがとうございます。

皆様方には、日頃から当組合の教育行政の推進に大変なご尽力を賜っておりますことに対しまして、重ねて感謝を申し上げます。

さて、この総合教育会議につきましては、地方教育行政法に基づき、首長と教育委員会が相互に連携を図り、教育に関する重要な課題について検討するものとして設置されたものでございます。

本日は、「地域づくりと若者の育成について」を懇談項目に掲げて意見交換を図りたいと思います。

暴れ馬のごとく、ますます進展するグローバル化、また情報化に加えまして、AIの飛躍的な発達などによりまして、社会構造の変化が非常に加速しているところでございます。こうした中、これからの子供たちには、単に知識を得るだけではなく、答えのない課題に対し、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得のいく解決策を見出す力など、新しい時代を生きていくために必要な資質、そして能力を身につけることが求められております。

また、地域では超少子・高齢型の人口減少社会が進展する中で、人間関係の希薄化や地域活動への無関心、また担い手不足など、地域コミュニティの存続が厳しい状況にあります。

こうした状況を踏まえまして、本日は鉢盛中学校コミュニティスクールの取組みを切り口にいたしまして、これからの地域づくりと若者の育成について考えていきたいと思っております。そして、この会議を通じまして、教育委員の皆様方と共通の理解や相互の連携を深め、鉢盛中学校の教育のさらなる充実に向けて取り組んでまいりたいと思っておりますので、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

事務局次長（小林伸一君） ありがとうございました。

引き続きまして、赤羽教育長からご挨拶をお願いいたします。

教育長（赤羽郁夫君） 改めまして、こんにちは。

令和元年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議の開催にあたりまして、教育委員会を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

昨年この総合教育会議では、発達障害の支援をテーマにいたしまして、信州大学の本田秀夫先生のお話をお伺いし、発達障害児への理解と今後の支援などについて大変有意義な意見交換をすることができました。

本年度は、先ほどの菅谷管理者のお話がありましたけれども、「地域づくりと若者の育成について」を懇談項目といたしまして、これからを生きる子供たちに育てたい力や持続可能な地域づくりなどについて意見交換をしたいと思います。

鉢盛中学校では、地域とともにある学校づくりを目指し、平成30年度からコミュニティスクール統括コーディネーターを配置いたしました。コミュニティスクールでは、地域の大人が子供たちに関わることによりまして、地域の絆の深まりや活性化、子供たちの自己肯定感の高まりなどが、そのような効果が期待をされているところであります。

本日は、藤田校長先生と市岡コーディネーターにもご出席をいただいておりますので、鉢盛中学校の取組みの現状や課題などをお聞きし、地域づくりと若者の育成について議論を深めていけたらと考えております。

終わりに、先ほど管理者のご挨拶がありましたように、首長と教育委員会との相互理解、連携が深まる、そこがこの会議の一番の目的でございますので、よろしく願いをしたいと思います。

教育委員会といたしましても、1市2村の様々な立場から、日々の活動をもとに意見を交わし、今後の取組みにつながる機会になればと願っておりますので、よろしくお願いいたします。

事務局次長（小林伸一君） ありがとうございました。

それでは、本年度初めての総合教育会議となりますので、改めて出席委員の皆さんに自己紹介をお願いしたいと思います。

お手元の出席者名簿がございますので、その名簿の順に沿って百瀬委員さんからお願いしたいと思います。

教育長職務代理者（百瀬司郎君） 改めまして、こんにちは。教育長職務代理の朝日村教育長の百瀬司郎と申します。よろしくお願いいたします。

教育委員（上條利春君） 朝日村の教育長職務代理をしております上條利春です。よろしくお願いいたします。朝日村の子育て支援センターわくわく館の館長もやらせていただいております。よろしくお願いいたします。

教育委員（根橋範男君） 山形村教育長の根橋範男と申します。よろしくお願いいたします。

教育委員（清澤あゆみ君） こんにちは。朝日村の教育委員の清澤あゆみと申します。鉢盛中学校では、中学3年生で子供がお世話になっております。よろしくお願いいたします。

事務局次長（小林伸一君） ありがとうございます。

それでは、これより議事に入ります。

議事の進行につきましては、菅谷管理者をお願いいたします。

管理者（菅谷 昭君） それでは、私のほうで議事進行を務めたいと思います。よろしくお願いいたします。着座のままで失礼いたします。

本日の懇談項目は、先ほど申し上げておりますけれども、「地域づくりと若者の育成について」でございます。

それでは、意見交換に当たりまして、まず初めに、藤田鉢盛中学校長先生から鉢盛中学校の取組課題についてお話をお願いいたします。

学校長（藤田克彦君） 改めてこんにちは。鉢盛中学校校長の藤田克彦と申します。よろしくお願いいたします。

では、最初に話題提供ということで、これから15分ほどお時間をいただいて報告発表させていただきます。よろしくお願いいたします。

では、着座にて失礼します。

事前にお配りをしました資料4ページでございますが、それをもとに発表をさせていただきます。

私は、昨年度より鉢盛中学校にお世話になっております。その前3年間は、筑摩野中学校でお世話になっておりました。本日は、まず前任校での実践に少し触れながら、鉢盛中学校での思いや構想等について発表させていただきたいと思います。

前任校の筑摩野中学校は、生徒数800名を超える大規模校でございましたが、やはり同市内中学共通のこととして、中学校と地域のつながりというものが非常に薄く、弱い、そういう状況でございました。筑摩野中学校には、寿地区と芳川地区、この2つの地区があるわけですが、特に寿小学校では文部科学大臣賞を受賞するなど、とても多彩なコミュニティスクールの取組みをしていますが、中学校では地域とのつながりが非常に薄いという状況でございました。

私は平成27年度に前校に就任しましたが、その前に、県や市全体の動きの中で、信州型コミュニティスクール設置100%を数年間で目指すという流れがありまして、その流れの中でコミュニティスクールとして動き出しました。そこでは、地域の方に中学校の支援に入っていただくというよりは、中学生が地域に出ていこうというコンセプトでスタートいたしました。地域の方への願いは、地域の中に学びの場を設定していただいて、地域の皆様にそのような機会を設けていこうというのが狙いで1年目をスタートしました。初めてのことでしたので、地域の理解を得るために、公民館長さん、町会長さんのところへ出向いて趣旨や学校の願いや理念を共有しながら進めていったわけです。当初は、「地域で中学生を育てるということか」「こっちに任せるとのことか」など、なかなか理解を得るのが難しい状況がありましたので、地域からいただいた機会は、もうこれは何が何でも応えようというところか

らスタートをして、部活動ごとに練習の時間をいただき、地域行事に参加をしていただきました。

中ほどに1年間の活動実績があるわけですがけれども、両地区からは、計16回、中学生にこういうところに参加していただきたいとお声掛けをいただきました。そのうち10回が運動会や文化祭といった地域行事であり、5つが町会行事、あと1つが施設の行事というようなところでした。

1年間の活動を終えたところで、特に地域の変化を感じたわけですが。地域の声として、子供たちの頑張りが地域住民の励みになっているとか、見えなかった中学生の姿が見えるようになったとか、また中学生は当てにできないと言っていた地域も、いまは中学生が大事な地域の担い手だという意見に変容したのが1年目の変化でありました。

その後、2年目、3年目と実践をしていくわけですがけれども、この地域の変容が子供たちに大きく関わっていて、資料の2年目の実績を見ていただくとわかりますけれども、活動の回数が16回から倍増したということは、地域への認知が高まってきたことかなと思いました。それから、活動形態として、今まで部活動に頼んでいたものを、全体に募集することによって自分から参加してくれるという子供が36人から1年間で約10倍、300人を超えるようになったということがあるわけです。振り返ってみると、生徒の意識の高まりは、一度体験したことによって、次に自分から参加する子供がリピーターになって、3年生が地域での中学生の役割を自覚したということと、もう一つは友人の姿を見て活動への参加が広がっていったということが見てとれました。

3年目には、ボランティアへの参加にさらなる広がりがあって、松本マラソンで80人の生徒の参加を頼むと言われたときに、4月の時点で80人の生徒が手を挙げて定員に達しましたし、そこに保護者も一緒に参加することができたことも大きな成果でした。また、ある年には、カン口飴の近くで火事があって、そこに消防団がみんな結集をしてしまった。その中で、地域の運動会に参加予定だった消防団員分を中学生が補ったということもありました。また、各町会の防災訓練でも、中学生のためにいろいろやってくださることで、地域とともに地域づくりしていくということが年々高まってきたかなということを感じていました。

そのような3年間のコミュニティスクールによって、中学生を中心にした地域との連携がよい形で構築できたのかなと思っております。それとともに、地域に飛び込んでいく中で、中学生が育ち、それを当てにしてくれる地域によって、中学生を育てていただいているというようなことを実感しました。そこで感じたことは、資料の中程にありますように、中学生にとって保護者、家族、また学校の先生といった必然的に触れ合う大人以外の存在や関わりが大きいということです。ただ、現代においては、日常にこのような機会がなかなかないので、このコミュニティスクールのような機会を設定しながら場づくりをしていく必要はあるなということを経験を通して感じました。

昨年度、鉢盛中学校に赴任をさせていただいて、そのような手応えを鉢盛中学校の中では

どのようなことができそうかなということで、1年半ほど取り組んでまいりましたが、昨年度はコミュニティスクール鉢盛モデルの立ち上げということで、組合教育委員会でコミュニティスクール統括コーディネーターを配置していただきました。この職員の配置が物すごく重要でありがたいということで、統括コーディネーターには今ある活動をスムーズにいくために、地域ボランティアとの連携調整をしていただき、これから進めていくために3地区のコーディネーターとの調整役として活躍していただきました。

初年度は、4月30日に、朝日村の新庁舎竣工記念式典で、中学生に校歌を歌ってほしいという話がございまして、これはいいチャンスだなと思って、村長さんの思いとか地域の願いをぜひ子供たちに伝えたいなということで、放課後朝日の子供たちに体育館へ集まってもらって話をさせてもらいました。ただ、参加の強制はしないということだったのですが、結果として当日行ってみたら、108名中90数名が当日来て校歌を歌い上げました。そのときに、本当に当時の中村村長さんが、こんなに本当に来てくれるとは期待していなかったということをおっしゃってくれて、その思いは当日いた子供たちにも伝えました。私は、子供たちの潜在意識の中には、地域に伝えようというものはあるんだなということを感じました。また、なぜこれだけできたかという大きな理由の一つとして、実はこの朝日村の新庁舎竣工記念式典が学校の年間計画に位置づけられていましたので、部活動も午前中で切り上げて、子供たちも式典に参加しやすい環境が整えられたのだと思います。そこで、職員への周知や理解、協力を上手にとっていけば今後の可能性もあるなと感じました。

実際、まずいまあるところから進めようということで、いろいろなボランティアの活動について、市岡さん中心にコーディネートしてもらいながら進めていきました。大きな成果としては、学校農園の管理運営、活用というところです。これは今までの鉢盛中の課題の一つでしたが、ボランティアの皆さんによってとても充実しました。ただ、農園がボランティアで充実しても、これをどうやって教育に活かしていくかというところの課題があったわけですが、そこでコーディネーターの市岡さんが大活躍をしてくださり、外のコーディネートだけでなく、今度は校内のコーディネートをして、特別支援学級の先生や家庭科の先生、生徒会活動にも声をかけていただき、可能な活動を引き出していき、そして特別支援学級のふれあい教育展での野菜の販売活動などにつなげていってくれました。

そういうところで、ボランティアと子供が関わってきて、1年目を終えたところで、学校ボランティアの皆さんの献身的な支えのもとで、安心・安全の環境整備が図れたんだけど、やはり生徒との直接の関わりが少なかったということで、何とか双方向の活動にしたいと願ったのが1年目であります。その思いを2月の運営委員会で伝えて、来年は何とか中学生が地域へという方法を考えたいと2年目をスタートしました。

そこで、松本版信州型コミュニティスクール鉢盛モデルって名称もすごく長いので、「CSはちもり」という通称にして、中学生が地域へ出ることを新たなアクションとしてランドデザインにも位置づけました。そして4ページ、本年度のアクションの1つとして、この

コミュニティスクールを双方向の活動にするためにPTAを巻き込んでいく。そういう方向を生徒やPTAに対して年度当初に発信して動き出しました。

具体的に、中学生が地域へというアクションをするために、ここでコーディネーターに活躍をしていただきました。3地区を回って、中学生にできそうな活動、または中学生にしてほしい活動の情報を集めていただいて、第1段階でまとめたのが3ページの下表です。そして、それを5月の運営委員会にかけました。ただ、このままでは動かないので、学校と3地区の地域コーディネーターで、今後の進め方を共有し、具体化するために6月に懇談を開催しました。ありがたいことに、ここで地域からこんなのもっとやったほうがうまくいくのではないかとのご助言をいただきました。

そして、各地域から具体的な募集をしてもらい、学校で生徒に広報、募集、取りまとめを投げかけて動き出しました。その第1弾が、「夏休み子どもひろばを一緒に企画しよう！」ということで、1年生女子がこれに手を挙げて、この写真にあるような会議に参加してくれました。

第2弾は、実際にこの夏休み子どもひろばの運営スタッフで、8人の生徒が登録をして、5日間で延べ23名分だったんですが、これが夏休みを終えた後、生徒に話をした写真になります。この中の3年生は、自分たちがお世話になった子どもひろばでスタッフ募集のチラシを見てやろうと思った。3日間参加して、大変なこともあったけれども、一緒に活動できて楽しかった。川遊びのときに、スタッフが、皆さんが来てくれるからこの活動もできるんだ、本当にありがと、ということ saying もらってうれしかったし、やってよかった、ということ saying していました。1年の女子は、去年まで自分が参加する立場だったけれども、自分が小さい子供たちと一緒に遊ぶのが大好きだったのでやってみたいと思った、また来年もやりたいと、そういう感想を言ってくれました。

今年度、実は私が一番期待していたのは、山形村の運動会なんです。これは10月12日、13日の台風19号で中止になってしまったんですが、実は運営スタッフをやってくれると言ったのはたったの2人だけだったんです。それでも、当日は、陸上部はぜひ活躍してほしいと伝えていましたので、この2人とリレーで活躍する陸上部の子たちの姿を見た他の生徒が絶対触発されるなという期待をしていたんです。それが中止にされたのは残念だなと思っていますが、ただ、ここまで活動して、資料の白丸3つあるような方向は少なからず動き出しができたかなと思いました。これが地域と少しでも共有できてきているかなと思っています。

また、課題の解決に向けて、年度内に各地区に意向調査をとって、主な地域行事を学校の年間計画に位置づけて示していくというのが生徒の意識化がつながるのかなと考えました。それから、もう一つは、3つの地区で実態も実情も違うので、足並みを揃えるんじゃなくて、それぞれの地区に応じた柔軟な活動で実りのある活動を進めていきたいと思っています。学校としては、そんな方向で動いていきたいと思っていますので、今日はそれぞれの地区の皆様方からまた双方向のご意見をいただきながら先が見えればいいなと思っています。一番は、

無理をしないでできることを積み重ねて少しずつ進めていきたいということです。そのために本日はどうぞよろしくお願いいたします。

以上です。

管理者（菅谷 昭君） ありがとうございました。

今、先生のほうからお話ありましたけれども、市岡さん、何かお話してもらっていいですか。もしあれなら、補完するようなこと何かあればどうぞ。

コミュニティスクール統括コーディネーター（市岡章子君） コミュニティスクール統括コーディネーターの市岡章子と申します。今年度で2年目になりますが、よろしくお願いいたします。着座にて失礼させていただきます。

今回、コミュニティスクールを立ち上げるに当たって課題になったのが、地域コーディネーターからも一番最初に言われたことですが、どうしても組合立という状況がお願いしづらい環境にあるということでした。なので、これをまず変えなければいけないなと思ひまして、まずはやっぱり学校の中からお願いできる環境をつくるということをやりました。職員にコミュニティスクールの活動を知ってもらうために、職員会や職員朝会等で活動を行っていることを報告し、また校長からは生徒、PTAに校長講話等の話で活動の内容を示していただいているということで、学校の中から、コミュニティスクールを進めているということを知ってもらうということから始めています。

その中で、今回2年目ということで、先ほども校長先生がおっしゃっていたとおり、地域の活動に中学生が出ていける環境づくりを今つくっている最中で、まだまだ少ない実績ですが、これから少しずつ広げられればいいなと思っております。

以上です。

管理者（菅谷 昭君） ありがとうございました。

ただいま鉢盛中学校長の藤田先生からは、筑摩野中からスタートして、そしていま鉢盛中のこともご紹介いただきました。市岡さんからも今年1年の振り返りをさせていただいたわけですが、そこで改めまして、これを1つの話のたたき台にしながら今日の話題にさせていただきたいと思っております。委員の皆さんにまずご発言いただきたいと思ひますので、よろしくお願いいたします。

こちらから指名いたしますので、まず根橋委員さん。

教育委員（根橋範男君） 日頃、思っていることを述べさせていただきます。

地域を担う人材の育成って、子供たちの社会力を育てていくことが大切かなと思ひます。その社会力ってどんな力かといいますと、地域の課題を主体的に捉えて、地域の人たちと協働してより多くの課題を解決していける力、いわば生きる力と言われているような力を社会力と言うんだろうなと考えています。こうした力の育成には、先ほど藤田校長先生が言われたように、子供たちの自尊感情の育成ということがとても大切なことかなと思ひます。そして、その自尊感情を育成していくためには、子供たちが社会に貢献しているという喜び

を実感できる機会というものを地域社会の中に積極的につくっていくことが必要なことと考えています。こうした教育的な考え方ではなくて、地域の活性化にとって中学生の力を活用したいと考えているその地域側からの願いもありますので、ぜひその中学生の能力の高さを地域づくりに生かしていくようなことができれば良いなと思っています。そういう意味で、学校と地域が連携して生徒を育てる信州型コミュニティスクール鉢盛モデルの役割というのがますます大きくなるのかなと考えています。

それでは、地域側から見た現状と課題を述べさせていただきます。

先ほど言いましたように、中学生の力を地域づくりに活用したいんだけど、募集しても中学生に参加してもらえないとのこと。その理由として、多分お願いする内容が不明確なのかなと思います。参加してもいいかな、という動機に直接つながるような狙いや目当てみたいなものを明確にして募集をしていくという地域側からの仕掛けが1つは必要なのかなと思います。

それから、もう一つは、小さい頃から地域の中で対話の体験を積む機会をたくさんつくっておかないと、子供たちが中学生になって、こういう事業に参加してねといっても、経験がないものですから、やっぱり地域はいっぱい思い出づくりを子供たちが小さいときからしておくことが大事なのかなと思っています。

それから、中学生の力を発揮してもらいたいと考える事業が、地域側から明確に示されていない。それは、中学生の能力がどこにあって、どんなことができるのかということがなかなか地域の中で考えられていないということがあると思います。実は、その中学生の力ってとても高いものがあるものですから、そういうものをつくって地域から学校側に発信していくというのが大事かなと思います。

それから、今の話とつながるんですが、中学生が地域づくりに活躍している場面というのが地域に還元されてない。知る機会が地域の中にあるということが結構あるのかなと思います。いろいろな活動に参加している中学生の場面というのを評価して地域の人たちにわかってもらうような仕掛けとかが必要になってくるのかなと思います。適正な評価と、それを見て中学生すごいと思う住民の感動を呼ぶような仕組みが必要なのかな、PRが必要なかなというふうに思っています。

実は、自分は個人的に中学生にぜひ演劇を地域の中でやってほしいなと思っています。というのは、昔、青年団があって、昭和44年に日本青年会館というところで、長野県代表で山形村の青年団がとても苦労して黒川堰で水を引いたという話を上演したようです。山形村の青年団が長野県代表で発表、上演をしたようなんですが、それをぜひもう一回復刻したいということで、去年が明治150年ですから、村内、村外に募集をしましたが、4人しか手を挙げてくれなくて、つくり上げることができませんでした。黒川堰でなくてもいいんですが、地域課題を演劇にして地域の中で上演してくれるようなことを中学生にぜひやってほしいなと個人的には思っていましたけれども、言い出しにくくて今まで言えてなかったので、

ぜひまた相談させていただきたいと思います。それをやったら、また熱い思いの人たちが生まれて演劇集団つくってくれて、地域の中で若い人たちの活動がまた展開できる機会となるのかななんて思っています。そういう意味でも、中学生の無限大の力というのを地域の中に生かしたいなと思っています。そんな今思っていることを述べさせていただきました。

管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。ご提案でございました。

それでは、次に清澤委員さん、思ったところをお願いします。

教育委員（清澤あゆみ君） 私は保護者の立場でもあるので、子供たちが地域とどういう接点を今持っているかなと考えてみたんですけれども、先ほど校長先生からお話もありましたけれども、朝日村の新庁舎のときには本当に大勢の子供たちが集まってくれて、みんな本当に感動していました。私の息子もやっぱり部活動を早く切り上げてきて参加していました。校歌についても、白峰祭のときには聞くんですが、そのときとはまた違った良さがあって、そのときの成果が本当に発揮されていて感動しました。

あと、朝日村の文化祭や大博覧会のように、合唱部の子たちが歌ってくれるんですけれども、やっぱり子供たちが来ると親御さんも来てくれますし、来場者数が少なくなっているというイベントに子供たちが出てくれることによって、その家族も見に来てくれるというのがあるので、ぜひそこもお願いできたらいいかなと思っています。

あと、朝日村には朝日太鼓があるんですけれども、白峰タイムの時間に、太鼓を習いたいと思う3年生の子たちが朝日村の体育館に来て地域の方に太鼓を教わっていて、何回か練習を重ねて白峰祭で披露してくれるんです。朝日太鼓ももっと大勢の人に継承していけたらいいかなと思うんですけれども、やっぱり人数が少なくなっている現状もあるので、山形や今井の子にも、朝日太鼓に触れていただいて、地域の人が教えてくれて発表までこぎつけてくれるので、それもすごくありがたいことだなと思っています。

あと、子供たちは摘果作業に行くんですけれども、これも暑い時期なので熱中症の心配があるんですが、農家の方たちもご苦労をすごくしてくださって、とてもいい経験をさせてもらっていると思います。この作業も根気が要ることだし、嫌だなと思う子たちもいると思うんですけれども、ぜひ続けていってほしいなと思います。職場体験でもそうですけれども、受け入れてくれる側があるので子供たちも行き場所があるということです。これからはいろいろな経験をさせてもらえたらと思います。

あと、核家族の家庭が多い今の状況の中で、施設に向いて、おじいちゃんやおばあちゃんと交流をさせていただいているのも、とてもいい機会だなと思っていて、今後も進めてもらえたらいいなと思います。

CSというところでうまく結びついていくかというのはわからないんですけれども、PTA総会のとときとか校長先生も発信してくださっていますけれども、総会に出ることができない親御さんとかも結構いらっしゃるかなと思うので、例えば参観日とか文化祭のときでもいいですから、保護者だけでなく地域の方にも発信していただけたら、CSの存在を知らな

い方にも、もっと知ってもらえるんじゃないかなと考えています。

また、朝日村のイベントで中学生の姿を見ることが余りないかなというところなんですよ。やっぱり部活動の大会があったりするとそちらが優先になってなかなか来れません。小学生まではみんな来ているんですけども、中学校に行った途端に足が遠のいてしまっている。部活動も、運動部の子たちだけじゃないと思うので、運動会に限らず、やっぱり学校側から出てもらいやすくなる仕組みを考えていただけたらありがたいかなと思っています。

以上になります。

管理者（菅谷 昭君） よろしいでしょうか。ありがとうございました。

それでは、今度は上條委員さん、お願いいたします。

教育委員（上條利春君） お願いします。

まず、藤田校長先生のすばらしい筑摩野中学校の実践の中で、子供たちの頑張りによって地域住民の意識が変わり、大人の励みや刺激になるということをおっしゃっていましたが、中学生が地域に飛び込んだんですよ。私も今清澤委員の言うように、やっぱり中学生にもっと地域の中でその存在感を見せてほしいというのが願いです。

昨年度、朝日かるたというのをつくったんですよ。そして、美術の先生を通して、美術部の方に頼んだら、10人ぐらいの子供たちが絵を描いてくれたんですよ。それから、読み札もつくってくれた。中学生すごいなということを思いました。それから、先ほども出たんですけども、朝日村役場の竣工式のときの生徒の多さと、すばらしい合唱。私は中学生の合唱が一番感動しましたね。

ただ、先ほども言ったように、なかなか中学生の存在がどういうところにあるのかわからない状況でもあります。例えば、防災訓練というのがありますよね。そういうところに中学生が防災についての発表をするというような機会を設けてくれれば、中学生ってこんな力があるのか、こんなことを考えているのか、ということが地域の認識につながって、中学生にももっと場を与えてやろうというような形になると思うんですよ。例えば、鎖川の整備やかたくりの里祭りへの参加という場もすごくいいと思うんですよ。さっき校長先生も言われましたように、年間計画の中にそのような地域の行事を位置づけて子供たちの意識を盛り上げてくれれば子供たちへの周知が可能かなというようなことを思うんですよ。やっぱり中学生って学業もあり部活動もあるので忙しいと思うんですよ。地域に貢献するということは大事なことだと思うけれども、なかなか中学生も時間がとれないので、やっぱりそこら辺のところを計画的に、地域の役員などと連携をとってくれればということをおもうんですよ。

もう一つは、これは願いなんですけども、地域の歴史や文化にも中学生に関心を持っていただいて、そういう地域の会に参加して、その知識を生かして、または自分で調べて、各地区そのものを知らない方のところで中学生が紹介してくれるような場があったら、本当に中学生が地域の中に受け入れられて、中学生の存在がすごく大きくなるんじゃないかなと思います。

先ほども言ったように今現在はやはり中学生の影が薄い。例えば、運動会への参加もなかなかない。中学生がもうこれで全てというような感じもあるのでね、ぜひもう一度中学生の存在感を地域に知らしめて、しかるべき活躍をしてほしいな。これが、将来の朝日村の子育て、または高齢者地域の助けにもなるし、支えにもなると思うんですよね。ぜひ、そんな力を中学生に担ってもらえればうれしいなと思ひまして、期待を込めて述べさせていただきました。よろしくお祈いします。

管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

では、次に百瀬委員さん、お祈いいたします。

教育長職務代理者（百瀬司郎君） お祈いします。

私、今の若い世代の方々に期待している1人なんですけれども、とにかく今の若い者という言葉が出てくるんですが、私は今の若者は本当にいいんじゃないかと思っているんですよ。以前は日本の若い世代に見られた控え目とか、あるいは自己表現を余りしないほうが美德だとか、そういうような雰囲気でしたが、今だんだんとそれがとれて、自らの考えを主張するような子供たちが多く育ってきているということで、大変私は期待しているところがあります。

今、鉢盛中学校の実践を発表してもらったんですが、やっぱり学校の中に地域の人が入ってきていただくという実践は多いんですけれども、子供たちが地域に出ていくという実践はなかなか授業時間が足りないとかいろいろな理由で制約が出てきます。そういった意味で、鉢盛中のこの実践というのは非常に意味があるなということをお祈いします。

先ほど筑摩野中学校の実践も発表されたんですが、私は実は筑摩野中学校の出なんですけれども、藤田先生のいた頃に、私も町会の役員で防災の部長をしていたときに一緒に関わらせてもらいました。このときに、やっぱり筑摩野中の子供たちが、地域に全員が振り分けられて帰ってきて、地域の公民館で防災訓練を大人の人と一緒にやるということをお祈い何年もやってきて、地域の方からも最初は、中学校は子供たちを俺たちにみんな丸投げするのかというような言葉も出てきたんですが、何年もやっていくうちにそういう言葉がなくなってきました。地域の人たちがどうやって活動をすれば子供たちが出てきてくれるかというようなことをだんだん考え始めてきたというのがこの活動なんです。そうすると、子供たちが町会ごとのメニューで、簡易タンカーや簡易ベッドを協力してつくるか、消防団と消火訓練を一緒にやるか、防災に向けたいろいろな活動が全地区で行われました。これは本当にすばらしいことだなというふうにはお祈いしました。

ある中学校の例なんですけれども、ある中学校はとても荒れていたわけであります。それが、生徒会がきっかけになって地域へボランティアに出ていこうという動きがあつて、その活動をお祈いすることによって子供たちをお祈いする地域の目が変わってきた。そして、生徒たちに達成感と自己肯定感が生まれて、自分たちに自信が持てるようになってきたという事例があるわけであります。その学校は今とても落ち着いていい学校になっているんですが、生徒がやっ

ぱり地域に出て地域の大人と会話し、一緒に物をつくり、一緒に汗を流し、また教えてもらうというつながりこそが中学生が自分を認めてもらえたという感情につながっていくんじゃないかなと思うわけです。

中学生というのは、それまで多分小学校からずっとつながってきて、一人前というふうに見られない、見られる体験がない世代だと思うんですね。親や親族に認められるということはあるかもしれないけれども、他の大人から認められるという体験はなかなか少ない。そういう意味で、大人の中で生きる自分を自覚していく体験、これをやはり大事にしたいなと私は思うんです。私の育った40年、50年前の時代というのは、割とそういうことは当たり前で社会の中にあっただけです。ですから、子供たちは地域の至るところに進出して、さまざまな大人と接触して、時には怒られたり、あるいは褒められたり、そういった体験というのはとても大きな成長の節になっていくんじゃないかと私は思います。

今、核家族化して、そういった体験も少ないので、家族の枠を超えられないという子供たちがやっぱり多いと思うんですね。全ての価値判断の中心は父親であり、母親になってきてしまう。そういったところが、やはり子供たちを大きく成長させる機会というものを失わせているという感じもする。そういう意味で、社会の中で子供たちが認められるという場をどう提供していくかということが私は大事なんだなということですね。そういった中で、まんざらでもない自分に出会っていくことがやはり中学生には大事だと思います。

そういった意味で、先ほど少し出ていきましたが、これから中学生が社会の中に入っていく機会をどうつくるかということですが、やはり職業体験は昔は1週間やっていたのがだんだんこの中学校も2日ぐらいしか時間とれないというような現状になっていますので、できればこういう機会を夏休み等を利用して、例えば農業体験をすとか、あるいは中学生を交えた地域防災訓練を行うとか、やはり地域に触れる機会を中学生にはぜひ持ってほしいなと思っています。朝日村も美術館があったり、あるいは山城があったり、そういう見学会に中学生出てくれたら絶対おもしろいと思います。中学生を地域に帰して、そして地域の中で生かしていく。中学生の顔が見えるような活動の場をつくっていくということが大事なかな。そういった意味で、CSはちもりには大変期待するものでございます。

以上です。

管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

この後、また校長先生にはお聞きしたいと思いますが、次に赤羽教育長をお願いします。

教育長（赤羽郁夫君） 今お聞きして、中学生への期待というのが各地域でも非常に大きなんだなということを改めて感じました。私はやっぱり地域における子供時代の出口が中学校段階だろうなというふうに思います。高校へ行ってしまうえばもう地域との絆というのが大分薄くなってきます。それだけに、子供時代の出口の最後の段階をどう過ごすかということは、やっぱり子供たちや地域の将来にとっても非常に大事になるんじゃないかなというふうに思っています。

鉢盛中学校はいわゆる組合立ですので、行政区も違う1市2村の小学校が集まって1つの中学校になっているという特徴があるものですから、この特徴をやっぱりその独自性と共通性というのをきちっと踏まえて運営して、それぞれよさを発揮していくということが大事ななということを思っています。今、3地区の小学校の話をしましたけれども、やはりその地区の小学校を経験して中学校へ来るものですから、その小学校時代をまたどう過ごしたかということもすごく大事になるというふうに思います。どの地区でも今お話があったように、最終的にはふるさとを愛する子供を育成していると思うんですね。それをまたどういうところに力を入れてやっているかという、きっと学校ボランティアなんかを中心にして地域の自然とか文化だとか、それから人との交流というようなことを主にやっていると思うんです。それがどう中学校へつながっていくかということもきちっと捉えていくということも大事な。その辺は、またぜひ統括コーディネーターにも3小学校とか3地域のニーズですとかしっかり把握していただくことも大事なかなと思っています。

中学生になったら、急に地域に出てこいと言っても、やはり先ほどもお話があったように、小学校時代に地域のことにしっかり関わって地域の人たちからいいことをやっているね、楽しそうだね、また来てね、とか言ってもらえるような体験の積み重ねが、中学生になって背中を押されたときに、出てみるかとか、やっぱりああいう体験をまたもう一回自分で経験し直したいなというような思いにかられるんじゃないかと思います。まずはそういう1市2村の小学校段階の育ちの基盤をしっかりつくって、その上に鉢盛が乗かって、子供時代の出口をつくっていくということが大事なかなということを思いました。

この間の月曜日に松本市では市政懇談会というのがありまして、今井地区で消防団員の確保についてという話題が出たんですよ。この提案理由を少し読んでみます。全市的に消防団を確保するのに苦慮する中、今井地区においては定員を上回る団員を確保できている。これにより、若い世代の人たちもいずれ入団し、活動していくという意識を持っている。当地区においても少子・高齢化は加速度的に進み、人口は減少している。消防団適齢期の人たちが多いわけではない。このような中であって、現状について考えてみると、住民のつながりに行き着く。今井地区では、地元の神社の祭典の運営は、20代を中心とした青年が担っている。ここでは、同年代ばかりでなく、上下10歳以上の世代の人たちが短期間ではあるが、深いつき合いをしてつながりができている。このつながりから、消防団という場でまた同じ目的に向かって活動することができる。そのようなことが提案理由で書かれているんですね。

私は、やっぱり中学校時代というのは、そういう意味においては強いつながりをつくる1つの核になる時代で、それが薄れても、また地域のお祭りみたいな場があると、もう一回それが固まってくるというものであるんじゃないかなと思っています。その小・中の連続性と中学校時代というものの大切さを今皆さんのお話を聞いて改めて感じたところです。

以上です。

管理者（菅谷 昭君） ありがとうございました。

今それぞれの委員さんからご意見いただきましたけれども、これを聞いて先生、いかがですか。

どうぞ。

学校長（藤田克彦君） 1つは、やはり願いや思いは一緒だなということを改めて感じました。やっぱりそういう部分をもう一度しっかり確認し合って、何ができるかということの一つ一つ具体化、具現化していくということがまだできそうだと思います。

それで、上條委員さんからもあったんですけれども、やはりいろいろなところで関わっていただいている立場の人がいるんだけれども、やっぱりそのときに共有、周知し切れないうるのももったいない部分もあるなということを感じました。今動き出したことを1つでも2つでも具体化していくことと、学校は何を大事にしていくかということを経験しながら、スリム化できるところはスリム化しながらその体制と環境を整えることも結果として大事な学校の出来事だということを感じておるところです。

あともう一点は、防災のことがあったんですけれども、やっぱり地域において中学生は役に立ちそうだし、当てにされることはあると思うんです。それを地域から直接伝えていただく機会、それが結果として、地域の人と子供たちが何回もつながる中でより太くなって行って、そして地域の中で中学生の顔が見えたり、直接声がけをしたりという関係ができていくんだと思いました。その中で、地域と若者が結びついていくかなということを感じました。

管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

市岡さん、先ほど赤羽さん言われていますけれども、聞いてみて何かあったらどうぞ。

コミュニティスクール統括コーディネーター（市岡章子君） やはり、地域の方の思いというのは本当にいろいろ聞いておりますし、それに向けて中学生が外に出ていく活動というのを少しでもできたらいいと思っています。この間も地域コーディネーター会でもお話をお聞きしたんですが、やっぱり中学生がいきなり例えば地域行事の運営委員会のスタッフをやるといったときに、夜の会議に出てほしいというふうに言われたんですけれども、やはり大人の中に急に中学生が出ていってできるかということ、ちょっと難しい部分もあるということで、受け入れる側の体制づくりもしていかなければいけないというような話も出ておりました。ただ段取りや準備も必要だし、中学生にとって達成感がないと続いていけない場合もあるんじゃないかという意見もあったので、そういったところを地域コーディネーターや地域の委員さんからの意見を聞いて、少しずつ学校と地域をつなげて、中学生が外に出ていける活動ができるようにしていきたいと感じたので、打ち合わせ等を重ねながら進めていきたいというのを改めて感じました。

管理者（菅谷 昭君） ありがとうございます。

今日の会議は、結論を出す場ではないものですから、それぞれのご意見を出してもらって、そこからまた学校、あるいは地域に考えていただけたらと思います。

昔だったら若者って地域へ出たり遊んだりしていたわけですので、実学として自然に学ん

でいかなと思うんですけれども、従来、地域と学校と家庭で子供を育成するというのは、実は地域づくりなんです。地域づくりと若者の育成なんです。地域で若者の育成じゃないんです。地域づくりというものが入っていますから、この辺は学校でどう考えているんですか。

学校長（藤田克彦君） 中学生が地域づくりをしていく、または地域の担い手になるためには、やっぱりその場に行ったりやったりしないことにはできないと思います。放っておいてもそれはできないことなので、こういう機会を地域とともに作り出して、一緒に中学生を育てていきたいと強く思っています。

管理者（菅谷 昭君） 育てていく、それは地域にお願いしていくということですか。

学校長（藤田克彦君） 一緒にです。一緒に、地域の中で活動することで、子供たちが学校ではできない体験ができるかなと思います。

管理者（菅谷 昭君） 僕は、学校は座学で、実学、実習は地域でやってもらうというふうに考えたほうがわかりやすいのかなと思ったんです。ボランティア活動は、地域づくりとはちょっと違うだろうと僕は思います。でも、やっぱり地域に子供が入って、地域づくりに参画するのが一番理想なんですけれども、なかなかうまくいかないよなと思ったときに、今回このコミュニティスクールが広がっていくといいなと思っております。ただやっぱり今お聞きすると、学校側としても時間的な配慮ができるのかどうかとか、中学生はなかなか参加できないというふうになってくると難しいところだなと思いました。先ほどのお話にありましたように、文化とか歴史とか風俗とか各地域のいろいろな伝統がありますので、そういうのを学んでほしいというのは皆さんおっしゃいますけれども、まさに松本もそのとおりだと思います。そういうときに、どうやって子供たちがそこにスムーズに参加できるかというのは課題の一つで、子供は少ないし、しかもスマホばかりやっていて、スマホを見るなら自分の町を見ようとか、何かそういうスローガンを何かつくって、子供を引き出せるようなことをしないと、なかなか出てこなくなっている。委員さんたちからは、何とかして中学生にも地域の文化を知ってほしい、演劇をつくって自分たちの歴史を演じてほしい、というようなお話がありましたが、僕はスマホより地域を見てほしいなと思っています。でも、時間があれば家にいたほうが、外に出るよりずっと楽し、そうじゃないんだよということを教えていくこともやっぱり必要なのかなと思ったけれども、僕が間違っているかもしれません。どうですかね、先生方は。

教育委員（上條利春君） さっき赤羽先生がね、地域の小学校がどういう体験をして、それがどうつながっていくかというようなことを言われましたが、まさにその通りだと思いました。さっき言った老人福祉施設、かたくりというのがあるんですが、そこは保育園や小学校とも交流していて、また我々はわくわく館もやっているんですよね。中学生が交流しているかどうかはわかりませんが、そういう場面にいると、例えば福祉の場面で地域にどういう問題があるのか、または老人の方にどういう手当てをすれば喜んでもらえるのかなというよ

うなことがわかってくるんだと思うんですね。そうすると、地域に対してももっと興味が湧いて、私が遊んだあのお年寄りはどう生活しているかなというようなのが意識として中に入ってきて、それが地域づくりにもつながっていくのかな。

だから、地域が中学生の活躍している場を見て、そしてまた中学生も、自分もできるんだというふうな自信を持ってまた地域に出ていく。その相互作用が将来的には地域づくりにもつながるのかなと思っています。

管理者（菅谷 昭君） 根橋委員さん、ここにも中学生の参加が少ないって書いてありますが、どうしたらいいと思いますか。

教育委員（根橋範男君） 先ほどもちょっと話したんですが、地域の呼びかけが抽象的過ぎるのかなと思います。

管理者（菅谷 昭君） 具体化させて参加させるということですね。

教育委員（根橋範男君） ええ。それと、やっぱり、さっき赤羽さんもおっしゃってましたけれども、小学校段階とかもう少し幼少期から、いろいろな体験をできる場をつくっておくと、中学生になったときに、一緒に参加して何か手伝ってねというときに割と出てこれると思いますし、それから、先ほど藤田校長先生の発表の中にもありましたが、中学生の活躍する姿を見て、その子どもひろばに参加した小学生が、僕も中学生になったらまたここに参加したいと言っていたらしいです。そうすると、その体験の場にはいないと実体験として見えてこない部分があるものですから、文化とか地域の歴史も含めて、経験する場を、思い出をつくれる場をつくるということをし掛けの中に組み込んでいくということも必要なのかな。中学生期ではなくて、小学生期の段階から積み重ねていって参加の機会を増やして、中学生にも参加したいという気持ちにさせていくことなのかなと思います。

管理者（菅谷 昭君） 清澤委員さん、どうですかね、いろいろな話を聞きながら。

教育委員（清澤あゆみ君） 鉢盛中学校の生徒を見てみると、地域の人と割と関わっているのではないかなと思っています。挨拶もしてくれそうですし、そういう意味ではいいかなと思うんですけども、やっぱり中学生って1人で行けとか、1人で何かしてってなかなか難しい年代で、友達が行くから行く、友達に参加するから行くというもので、一方、何かのきっかけで友達が行かなくなったりすると、やっぱり自分も行かないとかということが多々ある年代なので、1人だけではなく、大勢巻き込んで一緒に参加できるというふうにすると比較的、参加者も来てくれるかなと考えています。お互いに話をして決めて計画するという力は、鉢盛中の生徒には割とあるんじゃないかなと見ている部分があるので、いざとなったらそういうときにはぐっと力を発揮してやってくれるんじゃないかなって期待しています。

管理者（菅谷 昭君） 小学校のときは1人でもいいけど、中学になったら恥ずかしさもありますし。

藤田さん、その辺はどうですか。

学校長（藤田克彦君） 女の子は1人でもいいんですが、男の子のほうが今言った傾向は強

いですね。今回のボランティアを見ても、1人でも手を挙げるのは女の子。ところが、男の子は仲のいい友達と一緒にやろうという感じの傾向があるかなと感じています。

管理者（菅谷 昭君） 男のほうが純情だということですかね。

教育委員（上條利春君） それは、大人でもそうで、男は単独行動じゃなくて、何か誘ってやらないと行かないという傾向はありますね。

管理者（菅谷 昭君） どうぞ、先生。

教育長職務代理者（百瀬司郎君） 中学生は忙しいですよ。毎日が部活に追われちゃうから。そうすると中学校と地域が協力して、中学生が参加しやすい日を決めて、この日は中学校の活動の日、この日は地域に帰す日とかいうような物理的につくってやらないと、なかなか行きたくても行けないんじゃないかなと思います。そういうときに、例えば朝日村だったら、この日は武井城を見学する日だから中学生を参加させてみようとか、お祭りのときは企画に参加させてみようとか、そういうポイントを決めて、それぞれの地区の行事に中学生が先頭に立って動けるような場をつくって、それで、そういう中で人と人とのつながりをつくってやるということが、将来地域に愛着を持つというようなことにつながっていくんじゃないかと思うんですよ。

管理者（菅谷 昭君） 赤羽先生、部活動の忙しさについての話題も出ていますけれども、百瀬委員さんの今のお話のように、この日はこういうふうにやろう、部活動はこの日は何とかしよう、こういう体制づくりということは松本としてはどうですか。

教育長（赤羽郁夫君） 大事だと思います。私の地区の話をしめすと、中学2年生が子ども相撲というのをやっているんですね。出場するのは小学生以下で、采配するのは中学2年生と決まっているんですよ。いわゆる親方、子供時代の一番延長が中学2年で、もう中3になると大人になっちゃうものですから、そういうふうに決まっているんですよ。8月最初の日曜日、中学2年生が毎年親方でやっていたんですけども、部活なんかで忙しいというようなことで、今年から8月14日のお盆に時期を変えて、中学2年生が参加しやすい体制をつくりました。

それと、お祭りも9月にやって、我々の年代はみんな足痛い、腰痛いといって長持ちを担げなくなってきているので、やっぱり中高生をターゲットにしないといけないということで、中3でもう部活を引退した子たちが、小学校のときにずっとやってきた子たちに声をかけたら、今年は中学生のお子さんが何人も出てきてくれました。それで子供の長持ちはもういいから大人のやつも担げと言って大人のやつを担がせたりしたんですが、そこで活躍してくれるんですね。それならということで、慰労会にも彼らと呼ばうということで、焼き肉食べ放題もやったんですが、中学生と高校生がそこへ出てきて、まあよく食べること。また来年も頼むぞと言うと、わかりましたと言ってね。そういう大人との交流が楽しい思い出になりやすい状況をつくっていくと思います。それも、やっぱり小学生時代からの延長線上にあるし、6月の市中あたりで早く負けてしまって、少し行きどころのない中学3年生を受験まで

つなぐような段階でいい体験をして高校に行くというものと、1、2年生の頃は部活で大変だからなかなか出られないけれども、3年生になって地域で頑張るよというふうな機会をつくっていくということも大事なのかなと思います。

管理者（菅谷 昭君） 中学生に呼びかけというんだけど、その場合は町会が呼びかけたんですか。

教育長（赤羽郁夫君） ええ。

教育委員（上條利春君） それは、やっぱり伝統として、中学生を地域で活かそうという発想があるということがすばらしい。それが続いたんですね。私たちの地区にはそれが何もありません。だから、新たにそういう場をつくらなければいけないという段階です。

教育委員（根橋範男君） 小学生はお祭りに参加したんですね。

教育委員（上條利春君） 参加はしましたね。踊りとかね。

教育委員（根橋範男君） 山県村も地域の子どもが神輿担いでいますけれども、中学生はそんなことできません。

教育長（赤羽郁夫君） 朝日村では、夏祭りみたいものはやっているんですか。

教育委員（上條利春君） 各地区でやっています。

教育長職務代理者（百瀬司郎君） 村もあるね。でも中学生の出る番がない状況です。

教育長（赤羽郁夫君） 私も山の中の中学校にいるときに、その地域全体の祭りの運営や進行を中学生に任せてもらいたいということで、それをずっとやっているということがありますが、やはり中学生は活躍しますね。地域の役員や役場の人たちだけでやるよりも、何か柔軟な発想でね、おもしろかったですね。

教育委員（上條利春君） 場を与えれば多分やるよね。

管理者（菅谷 昭君） ぜひ場を与えてください。もう時間なのでそろそろ切りますけれども、鉢盛中はモデル的に非常にうまくいっているということですから、評価も高いわけですが、まだ途上にある状況ですね。今日のご意見を聞いていただきながら、こうしたらどうかということをぜひまた学校でもやっていただいて、特に教員の皆さんは大変だけれども、ここにいいモデルをつくっていただきたいと思います。そして、赤羽先生もおっしゃっていましたが、1市2村でやっていますから、地域性もあって大変難しいと思うんですけども、その共通の事項と独自性をうまくミックスしながらやっていったら、松本の35地区の中でも、鉢盛のモデルを参考にしていこうということになると思います。ぜひ鉢盛中がこの先陣を切って、校長先生は前任校の経験もおありですし、こうあるべきと決めないで、それぞれの学校の特色を持ってやってもらうといいのかなと思います。委員さんは各地域でも対応されていますから、その辺をぜひお願いできればと思っております。よろしくお願ひします。

何か最後にございましたら、どうぞ。

根橋委員さんから。

教育委員（根橋範男君） また演劇でお願いします。

管理者（菅谷 昭君） 清澤委員さん。

教育委員（清澤あゆみ君） 先ほど中3の話があったんですけども、本当に日々私も葛藤なんですけれども、うちの子は、勉強しなければいけないのはわかっているけれども、勉強したくないというのがあからさまでして。エネルギーはあり余っていると思うので、ぜひ部活動を引退後の中学3年生をうまいこと使ってやっていけたらいいんじゃないかなと思います。中学生もいろいろやらなければいけないものがあるほうが集中できると思うんですよね。時間があると、時間の使い方が難しいので。そういうのを与えてもらったほうが私はいいかなと思います。お願いします。

管理者（菅谷 昭君） はい。

教育委員（上條利春君） やっぱりスマホとかじゃなくて、地域での楽しさをもっと追求してやるような生徒になってほしいと思います。

教育長職務代理者（百瀬司郎君） 新しい学習指導要領で、新しい分野として防災教育というものがありますので、子供たちがちゃんと防災に視点を向けた地域のあり方というのを、やっぱりこれから考えていかなければいけないかなと思います。そういう意味で、中学生も一緒になって地域を考える。そういうことが主体になると思います。

管理者（菅谷 昭君） 防災のことで、日本のある村なんかは、昼間は若い人たちがみんな出てしまうものだから、村の中学生が消防隊をつくったりしてやってくれるそうです。今後の防災はそういうことだってやっていかないといけない時代になってきているような気がするものです。

最後に、赤羽先生。

教育長（赤羽郁夫君） ありがとうございます。今日は、地域づくりと若者の育成ということで、コミュニティスクールを核にしてお話し合いをいただきましたけれども、私はやっぱりコミュニティスクールというのは学校だけで完結するものではなくて、将来的にはやはり地域づくりというところをみんなで目指して行って、まさに学校と地域が双方向でそれぞれがよくなっていくことが大事だろうなと思います。ただ学校だけのためではないということもみんなで視野に入れながらこれからも進めていけたらと思います。

また、定例教育委員会等の機会でいろいろな情報を教えていただけたらと思います。どうもありがとうございました。

管理者（菅谷 昭君） それでは、予定していた時間になりましたので、それぞれ委員さんから忌憚のないご意見、また学校側としまして藤田校長先生、市岡コーディネーター、ありがとうございます。

本日の内容につきましては、事務局で議事録を作成して速やかに公表していきたいと思いますので、よろしくお願いたします。

それでは、事務局に進行をお願いします。

事務局次長（小林伸一君） どうもありがとうございました。

本日の結果につきましては、今管理者が申し上げたとおり議事録を公表するとともに、2月4日の2月定例会においても議員の皆さんに報告をしていく予定としておりますので、よろしくお願いいいたします。

#### 閉会の宣告

事務局次長（小林伸一君） それでは、以上をもちまして令和元年度第1回松本市・山形村・朝日村中学校組合総合教育会議を閉じます。ありがとうございました。

会議録調整職員 松本市・山形村・朝日村中学校組合 主事 深澤 亮平